

学習時間の配分に影響を及ぼす心理的要因の検討

秋元響

(立教大学大学院現代心理学研究科臨床心理学専攻)

KEY WORDS: 学習時間 達成目標 動機づけ 学習観

目的

行動の自己管理は、誰にとっても自立のための重要課題である。学習行動もその一例である。けれども、学習行動の自己管理は、決して容易ではない。ところで、目標設定が時間配分に影響を与えること(斎藤, 2014)や、大学生と言えども学習に対して肯定的でないこと(山地, 1991)、授業時間外の学習、自己学習の重要性(佐藤, 2003)、自己動機づけの有効性(梅本・田中, 2012)が明らかになっている。そこで、本研究では、どのような目標を立てる傾向があるかという「達成目標傾向」、どのように学習へのやる気を調整するかという「自律的な動機づけ調整方略」、学習に対してどのようなイメージを持っているかという「学習観」が学習時間の配分に影響を及ぼす要因であるか、検討した。本研究では、大学生を対象とするアナログ研究を行った。

方法

調査対象者 4年制大学に通う文系の学生139名(男子36名, 女子103名)であった(平均年齢18.74, 標準偏差0.90)。授業外学習に対する時間配分と姿勢を基準に群分けをした。

調査時期と方法 2016年9月, 授業中に協力を得て, 個別自記入式の質問紙調査を実施した。質問紙配布前に, データから個人の特定を行わないこと, 質問紙調査中に回答を拒否したいと考えた際, 回答を中止できることを説明し, 質問紙を配布した。回答はすべて無記名で, 授業中にその場で回答する集合調査形式で行った。

質問紙の構成 達成目標傾向を測定するために, 速水・伊藤・吉崎(1989)が作成した, 中学生の達成目標傾向尺度(26項目, 5件法)を大学生に対応する形に修正して用いた。また, 自律的な動機づけ調整方略を測定するために, 梅本・田中(2012)が作成した, 動機づけ調整方略尺度(25項目, 4件法)を用いた。そして, 学習観の測定には, 蔣(2013)が作成した, 授業外学習観尺度(15項目, 5件法)を用いた。学習に対する時間配分は, 過去3ヶ月の間, 授業外学習が平均何時間程度か, 5件法で回答を求めた。また, 授業外学習に対する姿勢は, 4件法で回答を求めた。最後に, 授業時間外の過ごし方について, 自由記述で回答してもらった。実際に使用した質問紙は, フェイスシートを含めて1冊に綴じて配布した。

結果

3つの尺度を, 主因子法, プロマックス回転で因子分析にかけた。達成目標傾向尺度は, 「学習を楽しむという目標傾向」「高い成績を求めるという目標傾向」「他人からの評価を求めるという目標傾向」の3因子が抽出された。動機づけ調整方略尺度は, 「環境・状況調整方略」「想像方略」「成績重視方略」「協同方略」の4因子が抽出された。授業外学習観尺度は, 「自己向上」「交友」「自分探し」の3因子が抽出された。

授業外学習に対する時間配分によって, 達成目標傾向, 動機づけ調整方略, 授業外学習観の下位尺度得点に違いが

あるか検討するために t 検定を行った。その結果, 学習を楽しむという目標傾向の下位尺度得点 ($t=4.43, df=137, p<.01$) と環境・状況調整方略の下位尺度得点 ($t=2.95, df=137, p<.01$) と自己向上の下位尺度得点 ($t=3.19, df=131.32, p<.01$) について, 授業外学習に対する時間配分が少ない群よりも多い群のほうが有意に高い得点を示していた。

次に, 時間配分が多い群と少ない群で下位尺度の関連性に違いがあるか重回帰分析を用いて検討し, 多い群の結果を図1に示した。多い群では, 達成目標傾向と動機づけ調整方略の下位尺度間で有意な相関がみられた。さらに, 動機づけ調整方略の下位尺度, 環境・状況調整方略から自己向上 ($\beta=.49^{***}$), 自分探し ($\beta=.34^*$) へ有意なパスがみられた。成績重視方略から交友 ($\beta=-.38^*$) への有意なパスもみられた。一方, 少ない群は有意なパスはみられなかった。

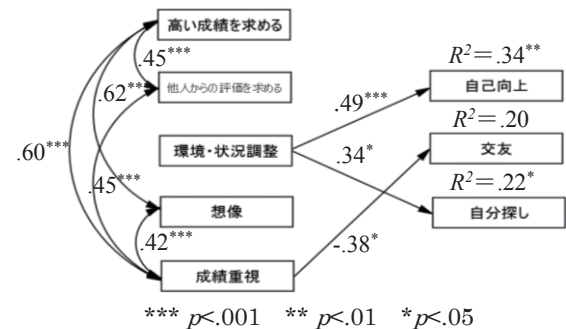


図1 多い群における, 達成目標傾向と動機づけ調整方略が授業外学習観に及ぼす影響

考察

達成目標傾向だけでなく, 動機づけ調整方略, 授業外学習観にも違いがみられ, 仮説は支持された。学習自体を楽しむ, やる気を環境や状況で調整し, 自己向上のために学習している人は学習時間が多いという, 新たな知見がもたらされた。また, 授業外学習観の下位尺度に影響を与えている環境・状況調整方略と成績重視方略は外発的動機づけであり, 内発的動機づけだけでなく, 外発的動機づけも学習観に影響を与えていることが明らかになった。伊藤・神藤(2003)は, 外発的動機づけは, 学習の過剰な負担や学業ストレスを軽減することで効果的な学習を促す働きを持っていること, 一方で, 内発的動機づけを低下させること, ねばり強い学習に繋がらないことを明らかにしている。学習時間をきちんと確保できている学生は, どちらかの動機づけに依存することなく, 自分自身の状況によって動機づけ調整を行っていると考えられる。以上の結果から, 動機づけ調整方略, 授業外学習観は時間配分に影響を与える要因になる可能性があることが示唆された。しかし, 目標設定が学習観に影響を与えるという結果が出なかったため, 他の目標設定に関する尺度を用いて, 検討し直す必要があるだろう。

(AKIMOTO Hibiki)